

曲直瀬道三の『薬性能毒』について

宗 田 一

『薬性能毒』と『注能毒』は、曲直瀬一溪道三が金元医学の薬性説によって編した一溪道三の代表的薬物書として知られる。

しかし両書の刊本は、玄朔（二代道三）の校訂を経た江戸期のもので、『薬性能毒』は二巻本、『注能毒』は三巻本であるところから、前者に注を加えたものが後者だと簡単に考えられがちだが、それが妥当か否かを再吟味してみたい。それはとりもなおさず、これら書物の編纂経緯を確認することにもなる。

刊本『薬性能毒』には、巻末に玄朔の識文があるが、これは玄朔が慶長一三年（一六〇八）に新着の『本草綱目』

をいち早く利用して一溪道三の能毒書の増訂を行い、薬名の配列も上巻に草部、下巻に菜部、穀部、果部、木部、介部、獣部、石部を収め分類している二巻本を底本としているのに対し、刊本『注能毒』は、一溪道三の二巻本能毒書に数種の薬物を追加した二巻本に天正八年（一五八〇）に注文を付したものを底本にした三巻本であり、『注能毒』の本文の方が、一溪道三の本文の古形を残しているようにみえる。

この一溪道三の能毒書の二巻本から三巻本への改訂にも玄朔が関与していて、玄朔の識文を持つ『薬性能毒』三巻本があり、元龜二年（一五七一）秋に校正した正本が失われたため、文祿五年（一五九六）に写し直した旨の記載がある。この三巻本の薬名配列は、刊本『注能毒』と全く同一で、使用頻度の高いものを上巻に、それに次ぐものを中巻に、さらに低いものを下巻に収めてある。これによって、刊本『薬性能毒』の底本は、三巻本『薬性能毒』を玄朔が増訂し二巻本に編纂し直したものであることがわかる。

刊本『注能毒』の本文には誤記がままみられる。たとえ
ば中巻の「甘草」の條を、刊本『注能毒』①と三卷本『藥
性能毒』②とで比較すると次の通りである。

①解藥毒、和草石、咽痛、咳嗽、熱寒藥用之、緩其熱、
莖中痛、寒、載諸藥。

中滿ニハ、下焦の急病ニハ、發散瀉下ニハ、

②解藥毒、和草石、咽痛、咳嗽、(稱)莖中痛、熱藥用之、
緩其熱、寒藥用之、緩其寒、載諸藥、

(朱字……禁用または毒の意) 中滿……

ちなみに、刊本『注能毒』の甘草の條の注文に興味深い
記載があつて、甘草は使用頻度の高い藥なのに上巻に入れ
ずに中巻の巻首に収めたのは、甘草が頻度は高いが少量を
使うからであり、また林竹のために七一種の後に五五種の
藥性を教えたとき、その初めに甘草があつたためだとあ
る。

この林竹とは、森山林竹という文盲の弟子で、一溪道三
が林竹の頼みで香附子から始めて七一種の藥性を教え、さ
らに甘草から始めて五五種を追加したという意味である。

右の林竹伝授の時期は不明であり、また一溪道三の二卷
本能毒書の元本も管見に入っていないが、『日用藥性能毒』
という一巻本があり、永祿九年(一五六六)閏八月一三日
に出雲の毛利元就の陣中で一溪道三が編したもので、よく
知られている『雲陣夜話』より数ヵ月早い編纂である。

本書は田代三喜の晩年に伝授された師伝一二〇種に、其
の後の一溪道三の經驗を加えた伝外五三種の計一七三種の
藥物を「草木玉石次第不同」一巻に編したもので、この書
が一溪道三の『藥性能毒』の祖本である。

一溪道三には、右の一年前の永祿八年(一五六六)八月
二〇日に編した『本草能毒』と題する三卷本が別にあり、
二一〇種の藥物を収める。

一溪道三は、享祿四年(一五三一)に田代三喜から能毒
を伝授されて以来、能毒について調査研究した成果の一つ
と考えられ、こうした上で翌年の『日用藥性能毒』へと結
束したものであろう。この『日用藥性能毒』一巻本がさら
に編纂し直されて二卷本となり、さらに玄朔の校訂を経た
三卷本へと進展したのであった。

ちなみに、田代三喜の『能毒集』も現存しており、その元姿をうかがうことができる。

(京都府京都市)

『本草綱目』の伝来と金陵本

真柳 誠

『本草綱目』のわが国への伝来年、およびその初版である金陵本の伝存については、従来からの定説がある。しかしこれに訂正・追加すべき知見を得たので報告したい。

『本草綱目』の日本への伝来は、これまで慶長十二年(一六〇七)とされてきた。それは『徳川実記』の同年四月の条に、「(林羅山が)長崎にて本草綱目を購求し、駿府に献じ奉る」と記録されるのによる。白井光太郎・南方熊輔・渡辺幸三・岡西為人・上野益三・木村陽二郎ら諸氏は、いずれもこの説を記している。

ところが林羅山の第三子の春斎がまとめた羅山の年譜(一六六二年刊『羅山先生集附録』巻一)には、定説を遡る記録が見える。「既見書目」と通称されるこの記録は、